

浜松市外国人学習支援センター視察報告書

日時：平成31年2月13日（水）10:00～12:00

場所：浜松市外国人学習支援センター

対応者：浜松市企画調整部 国際課 課長 佐藤 宏明 氏
同 課長補佐 原川 知己 氏
浜松市外国人学習支援センター 主任 内山 夕輝 氏

目的：外国人支援の先進地である浜松市を視察し、今後増加するであろう外国人、そしてその子供たちに対応する準備の参考にするため。

スケジュール：

- (1) 浜松市の概況
- (2) 在留外国人の状況と取り巻く環境
- (3) 多文化共生の取り組み
- (4) 浜松市多文化共生都市ビジョン
- (5) 国内外の多文化共生都市との連携
- (6) インターカルチュラル・シティ
- (7) 浜松市外国人学習支援センターの取り組み
- (8) 質疑

内容：

(1) 浜松市の概況

外国人数：24,275名（うちブラジル人 9,320人が占める。日本一ブラジル人が多いまち）
そのブラジル人も1988年時点で28人だったものが、2008年に19,461人に大幅に増加。
リーマンショックで減少したが、また増加傾向にある。

(2) 在留外国人の状況と取り巻く環境

外国人人口も労働者も増加している。背景には、グローバル化の進展と人口減少労働力不足、国による新たな在留資格の創設があげられる。そして、2020年には東京オリンピック・パラリンピックが開催され、益々増加すると予想される。

公立小中学校に在籍する外国人児童生徒の状況は、小中学校とも増加傾向。全児童生徒数で2.7%となっている。

国籍別割合は、ブラジル人48.6%をはじめ、全26か国。外国籍児童生徒の在籍率83.6%（122/146校）

(3) 多文化共生の取り組み

①多文化共生とは、「国籍や民族などの異なる人々が互いの文化的差異を認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」である。

②外国人自民が抱える問題と地域の課題

- ・言語や生活習慣・文化等の違いから生じる摩擦や課題が顕在化している。
言語、社会保障、雇用、教育、外国人登録、地域トラブルなど多種多様。

③取り組みとして、

- ・多言語による生活相談や情報提供、庁内への通訳職員の配置
- ・レベルに応じた日本語教室の開催
- ・広報誌やゴミ回収カレンダーなど行政情報や生活情報の多言語化
- ・防災アプリ作成など防災情報の作成・発信（登録制で現在七百数十人）
- ・地域の回覧文書の翻訳支援など自治会への支援（自治会には4割程度加入している）

④外国にルーツを持つ子どもの教育支援

(4) 浜松市多文化共生都市ビジョン

- ①目指す将来像・・相互の理解と尊重のもと、創造と成長を続ける、ともに築く多文化共生都市
- ②目指す方向性・・○異なる文化を持つ市民がともに構築する地域
○多様性を都市の活力と捉え、発展していく地域
○誰もが安全・安心な暮らしを実感できる地域
- ③重点施策・・・・◇外国人市民のまちづくりへの参画促進
◇次世代の育成・支援
◇多様性を生かした文化の創造・地域の活性化
◇防災対策
- ④施策の3本柱・・○認め合い、手を取り合い、ともに築くまち
○多様性を生かして新たな価値・文化を生み出すまち
○誰もが快適に暮らせるまち

(5) 国内外の多文化共生都市との連携

- ①国際シンポジウムなどの開催

(6) インターカルチュラル・シティ

- ①インターカルチュラル・シティ・プログラムとは、欧州諸都市において2008年に国際機関である欧州評議会の主導により始まった都市政策で136か国の年が加盟している。多様性の利点を活かした取り組みを推奨。

(7) 浜松市外国人学習支援センターの取り組み

- 2010年に開設され、多くのボランティアなどが関わっている市民協働で、①日本語教室、②ボランティア養成講座、③多文化体験・交流、④ポルトガル語講座、⑤地域日本語学習支援、⑥不就学ゼロ作戦の六本の柱で運営。

目指すところは、①安定した就労、②保護者として、③地域活動、④ボランティア活動、⑤ビジネス展開

(8) 質疑

①外国人がセンターに来るきっかけは？

口コミ、紹介、ホームページなど。市窓口で最初の手続き時に日本語教室ちらしが入ったウェルカムバッグを配布している。

②地域住民と支援センターの交流はあるのか？

イベント開催で出来るだけ交流できるような仕掛けをしている。そば打ち、餅つきは住民の方々のボランティアで開催出来ている。

③日本語に興味を持ってもらう、覚えてもらうために授業の工夫はあるか？

日本語ゼロで「不安がいっぱい」からスタート。寄り添い支援。
テキストを自費で購入してもらう。

④センターに来ていたる外国人の家族に対しての教育と支援はあるのか？

20～40代、女性が多い。国際結婚も多い。家族でも言葉が通じないケースがある。
本人以外で子どもを支援（託児サービス）など

⑤「黄色いカード」防災カードについて

防災訓練時に必ず使用する。普段冷蔵庫に貼ってもらっている。

⑥ボランティアの方はどんな人？

20～70代 駐在体験者など市内広域から来ている。

⑦子どもたちの進路は？

高校進学：定時制 30%、全日制 30%、私立 40%

⑧日本語を教える理由・目的

共通言語は日本語。日本で活躍してほしい。

⑨外国人イベントでドタキャンを心配するが大丈夫か。

時間感覚が違う。雨が降ったりすると来ない事もある。イベント参加を呼び掛けるときにはキーマンになる人に声をかける。

⑩資金は市単なのか。

企業からの資金提供はない。一般財源で年2億、教育資金1億、施設1億で3.5～5億程度の予算。先生は非常勤30人で280万円

⑪人口の割に犯罪率が低い理由は。

分からない。

※写真



所感 成川正幸

外国人労働者が増えれば、必然的に子どもたちも増えていき、色々な課題が出てくるのだという事が分かった。外国人は義務教育ではないので教材も分かりやすいように工夫をしていた。本市にはまだ外国人が少なく、その子どもに関しては居ても数人だと認識している。しかし、政界情勢や日本の入管法改正などにより今後どのようなようになっていくのかで変わってくる可能性がある。それも浜松市に外国人が短期間で急増している例からも考えられる。国際都市黒部は多文化共生に向けて、どんな事があっても対応できるように色々な角度から備えておく必要があると考える。先進地事例として浜松市に伺ってとても参考になった。